

創立153周年

始良市立柁城小学校 学校だより夏休み号②



# 生き生き柁城

やる気・元気・根気



No.474

令和6年8月1日

いきいき柁城ブログ

いつまでも伝えゆくべきこと  
～ここで起きた出来事として～

校長 有村 和章

「チャレンジのある夏休み、そして、安全な夏休みを」と話した終業式から早くも12日がたちました。パリ五輪も始まり、連日報道されるチャレンジ精神溢れる熱戦にはつい見入ってしまいます。

そのような中、本校の子供たちも頑張りました。25日に開催された市水泳記録会では代表の5、6年生が、また27日開催の県吹奏楽コンクールでは金管バンドの皆さんが、それぞれ大舞台で力を発揮する姿に大変感激しました。また、6年生のPTA親子レクや親睦委員会による肝試し、そして親子キャンプも行われ、参加した子供たちは夏休みならではの楽しい思い出ができたことと思います。関係の保護者の皆様は熱中症対策も含めたきめ細やかな準備が大変だったことと思います。本当にお疲れ様でした。



親睦委員会主催「夏休み親子キャンプ」  
～“河童”も現れ、楽しく水遊び～

さて、夏休みを利用して棕鳩十文学記念館で開催中の「棕鳩十と戦争」展を訪ねてみました。本校の児童も訪れていることに感心しながら館内を見て回ると、戦時中をここ加治木で過ごされた棕鳩十さんが身をもって体験した戦争の恐ろしさに言葉を失いました。加治木高等女学校生の長崎の軍事工場への学徒動員の際には引率をされたそうです。まだ十代の女学生が真冬に霜焼けのできた手で冷たい魚雷を一生懸命磨いている姿に「涙が出そうになった。」とありました。また、終戦4日前に起きた加治木大空襲の際には、防空壕の中でどすんどすんと鳴り響く爆弾の音や、容赦なく降り注ぐ機関銃のタタタ、タタタという音にぶるぶる震えていたと記されていました。

さらに、棕さんが終戦後20年の時を経て執筆した「マヤの一生」の映画版パネルも展示されていましたが、この物語は加治木町を舞台に棕さんの体験に基づいて描かれたものであることを職員の方からうかがいました。棕さんがご家族や愛犬マヤと過ごした場所は、加治木幼稚園のすぐ下にある交差点を本校方面から右折し、100mほど進んだ左手、現在はアパートが建っているところだそうです。「マヤの一生」に描かれた動物たちと棕さんの子供たちとの心豊かな触れ合いと、そのすべてを消し去った非情な出来事はこんなにも身近な所で起きたものであることに私は大変驚きました。

先述の加治木大空襲\*では、兵隊などいるはずのない本校や中学校、高等女学校も狙われ、全焼したそうです。当日登校していた中学生たちの若過ぎる命も一瞬にして奪われたとのこと。「マヤの一生」と同様に、まさに「ここ」で起きた出来事だったのです。

戦後79年、子供たちに伝えゆくべきことは何か。まずは、“昔々、どこか遠くにある場所で起きた出来事ではない”ことを確かに伝えることが現代を生きる私たちが大切にすべきことではないかと改めて感じました。



棕鳩十生誕120周年記念企画展「棕鳩十と戦争」～記憶を刻み、未来につなぐ～

裏面に続く

「マヤの一生」は、次のような書き出しから始まります。

マヤは、ほんとに、りこうな犬でした。

今、二十何年もまえに、わたくしどもから、永久にはなれていってしまった、マヤのことを考えても、マヤの鳴き声が、はっきり耳の底によみがえってくるほど、マヤは、わたくしたちの心の近くにいた犬でした。

わたくしたちは、ほんとに、マヤを家族の一員と考えて、長いあいだ、いっしょに、暮らしたのです。

そのマヤも、人間と同じように、戦争のもたらす、暗く悲しい運命からのがれることができませんでした。

マヤのことを考えると、ほんとに胸が、キリキリと痛むのです。

わたくしは、このマヤにささげる物語を書きたいと、長いこと考えていました。今、ようやく、その願いをはたすことができました。

【引用】久保田里花監修『100年読み継がれる名作 椋鳩十童話集』世界文化社、p.73

椋さんは、県立博物館長時代に「母と子の20分間読書運動」を提唱され、これは鹿児島から全国に広がりました。ぜひ、多くの椋鳩十文学に親子で触れていただければと思います。そして、椋さんが作詞された本校の校歌の歌詞にはどのような思いが込められているのだろうと想像を膨らませてみるのもよいのではないのでしょうか。

校 歌 作詞 久保田 彦穂(椋鳩十さんの本名)

作曲 武田 恵喜秀

(昭和28年6月12日制定)

一 光る風 光る朝日よ  
蔵王岳 高くそびえる  
柁城の子 あゝ胸をはり  
いだくもの 輝くのぞみ

三 光る風 光る朝日よ  
大空の 美しい心  
柁城の子 あゝことごとく  
みがくもの みそらの心

二 光る風 光る朝日よ  
網掛の つきない流れ  
柁城の子 あゝはげみ合い  
深く汲む 知識の泉

四 光る風 光る朝日よ  
錦江は 世界に続く  
柁城の子 あゝ胸ひろげ  
手をつなぐ 世界の子等と

\* 加治木町では、昭和20年4月26日と8月11日の2回、空襲を受けているようです。特に、2回目の空襲は被害が大きく、わずか20分程の間に18機(別説35機)の超低空飛行による猛攻撃を受け、加治木町役場や本校(当時は「柁城国民学校」、旧制加治木中学校(現加治木高校)、加治木工業学校、加治木高等女学校等が罹災し、町の9割が焼けてしまったそうです。死者数は4月が17人、8月が中学生14人(別説15人)を含む26人(別説27・28人)、罹災者数は4月151人、8月2895人。(加治木郷土館資料より)

## ☆ 体験したこと、考えたことを作文に書こう！

今年の椋鳩十文学記念館賞全国読書感想文コンクールは、椋さんの生誕120周年を記念して「マヤの一生」を全学年共通課題作品としています。(各学年ごとの課題作品もあります。)また、このほかにも県児童生徒作文コンクールなど多くの作文コンクールがあります。夏休みの課題帳を見て、ぜひ取り組んでほしいと思います。

